
続・エレベーター

ドボク

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・エレベーター

【Zコード】

Z1744F

【作者名】

ドボク

【あらすじ】

エレベーターの続きの作品です。孝は深夜のエレベーターで京香
と出会いそしてエレベーターは突然の故障で止まり何かが起こる

先輩とボク

1階～17階 斎藤 孝

いつ乗つてもうちの会社のエレベーターは広いなあ。

いつも500～600人が出入りする。

しかし2時が過ぎるとさすがに人が少なくなる。

20人乗りにボク一人で乗ると寂しすぎるところもある。

エレベーターはモーター音を静かにたてながら13階にせしかかった。

もうそろそろ17階だ。

グォーガタン、エレベーターが13階で止まった。

誰だらうこんな時間に？扉が開き誰かが入つて來た。

「えつ 先輩??」

ボクの4つ上のなかじま中島京香きょうか 先輩だ。社内でも腕利きの美人社員なんだ。髪を綺麗に後ろで束ね、身長は160センチ後半とすごくスレンダーな体をしている。

深いのが薄く化粧した黒のアイシャドウにアカブチのメガネがキャラウーマンの雰囲気を出している。 ボク自身も中島先輩には色々な恩がある。

お世話になつてゐる先輩なんだけどこの人はとても気の強い女性でボクはいつも‘ハイ’の一つ返事しかできないのだ。「お、お疲れさまです！」 先輩は20階のボタンを押しながら言つた。

「あら？ あなたも残業なの？ お互い大変ねえ」 甘い誘惑のような声で先輩は話しかけてきた。

「せ、先輩もこんは時間まで残業ですか。

何氣ない会話もこの先輩には一苦労だ。

「 そうなのよ。

明日までに済しても終わらせないといけない仕事があつてね。

「 そ、 そうですか。

それは大変ですね。

「 でもねえ 間に合いそうにもないのよ。
仕事… 誰か手伝ってくれないかしら。

「 先輩は上目使いをしながらボク
の方を見た。

まさか手
伝つてほしいのか！？
も迷惑ばかりかけているボクが！
手伝つて
ほしいのなら仕方ないこには男らしいところを見せておくべきだ。

ボクは先輩の目を見て
「 いいですよ。いつも
その

先輩には迷惑ばかりですから手伝いまつ

瞬間

ガー ガア－ ガタン。

大きな音をたててエレベーターが止まつた。 エレベーター
のライトがきえて真つ暗になつた。

「うわっ何なんだ！？ 一体？」 「落ち着いて、
多分故障か停電よ。」「心配ないわ。バックアップ用に電気はすぐ
につくはずよ。」

先輩の言つた通りライトはすぐについた。

しかし肝心のエレベーターが動かない。

ボクは不安と恐怖で胸が押しつぶされそうになつた。

「 大丈夫よ。朝になれば誰か来る

わよ。」 先輩は自分に言い聞かせるようにボクに小さく声をかけた。情けなかつた。自分の不甲斐なさに嫌気がした。

男であるボクがオロオロして女の先輩がしつかりしている。いつも先輩に頼つてばかりだ。

やあダメだ。ボクが何とかしないといけない！ボクはできる限りのこととした。

ついてある。

ペレーターの反応がない。次にケータイで外と連絡しようとしたが電波は圏外となっていた。天井の配管を外して外に出ようとしたらが頑丈な鉄格子あつて外せない。ハ方塞がありである。しかしこのままでも朝になれば早朝出勤の社員が来る。誰かがくるまで待つことにしてボクにずっと黙り込んでいた先輩が話しかけてきた。

「ねえここ寒くない？」「いえ、あまり寒くないですけど。」

変な質問だ。

確かに今は1月の1番寒い季節だがそこまで寒いとは思わない。エレベーターの緊急ボタンを押し続けていたボクは急に先輩が気になり後ろを振り向くと先輩はうつ伏せになつて倒れていった。「せ、先輩！」ボクは慌てて先輩を起こした。先輩の顔は赤く火照っていた。呼吸も荒く額に手を当てるど、とても熱かつた。

医者でもないボクにだつてこの状況はとてもヤバいことくらい容易に分かった。

しかしながらをしてよいのかわからぬ。

弱っていく先輩を見てとりあえず横に寝かせて今着ている服を全て先輩にかぶせた。そしてコンビニで買ってきたペットボトルを額に当てて氷嚢のかわりとした。

気付けばボクはパンツ一枚となつていた。

上着やズボンを先輩にかぶせたためボクは裸同然の格好となつた。生まれが東北だけにこんな寒さはへつちゃらだつた。しかし病人がいる以上早くここから出ようと色々手段をとつていたら先輩がボクに手招きをしてよんだ。小さくかれ声でボクにいった。

「ゴメンネ

私のせいでこんな事になつて

て否定した。

「すよお」

「ほらひいつも先輩には迷惑かけてるし、この前も先輩は必死でしやべるボクの口を人差し指で抑えて微笑んだ。先輩の人差し指がボクの脣にあたつた。先輩の人差し指は温かくてやわらかかった。

「ねえ寒いからあなたも一緒に温まるつ thy」

「えつ！？」

「いいからきて」

横へ寝た。近い。とても近い。近すぎる。こんな近い距離に女性と一緒にいるのは初めてだ。多分この時のボクの心情は不安や恐怖心は無くなっていたがすごい緊張していた。「ねえ、孝一君てさあ」

！ 初めて名前で呼ばれた！

いつもなら、あなた、や、きみ、なのに…

そう思つてこるとなんだか先輩のことを意識するようになった。

「ちょっと聞いてる？」

ボクは慌てて返事をした。「え」というですねえじやあ先輩は…「その先輩はやめてよ。京香つて呼んで」

そう言つて先輩は微笑んだ。

ドキッ！……！

もうボクの心臓はドキドキしていた。

「えつ でもいいんですか？」

「いいわよ。呼んで」「じゃあ京香さん…」

「うん……」

そう言つてボクにキスをした…

てシャンプーのにおいがした。

あとのことはよく覚えない確かあの後すぐに助けに来て

先輩は病院へ連れて行かれた。

これから先、どうなるかわからないけどボクは先輩に自分の気持ちを伝えるつもりだ。

「好きだ。」と…

ボクはあわて
「そんなことない

ですよお」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1744f/>

続・エレベーター

2011年1月12日23時02分発行